明烏後正夢 五編 上

へ 13
2909
16

序

南山の四皓ハおらねど昔乃袖の香に匂ふ
橋街乃南仙子が去るね歳に著しつれ
明烏其趣ハ近き頃専ら江湖上に行るゝ
新内節の戯曲に作りなしたる時次郎
浦里たぐひなき名を今に残して克く人情

門 へ 13
號 2909
巻 16
昭和九年七月二十一日

兎まれかくまれ徳が権次や次郎兵衛
がくへ八句の鸚鵡さんお隣の内室さん
みな譯知名も年々歳々この才當りに八十歳
五扇名満尾にむかし己も往に四番目よ
序文やいふ浪語を書つけしたまひしが又
今茲も這端書をとときてやらまし其尚吉と

巻をまべ十といひつ三ッ四ッも經し此頃
昔の事なりかくれん此新内といへる家のなごかく
近来流行せしも其流れ弟も今の岡本
美家吉太夫が二代目鶴賀新内門弟初名八尾太夫今岡本美家吉太夫改両国横網住岡本の家元也
門に入りて壇辛抜をを張りあげて土堤
八町を素見戻るも乱れ初にし浦里の

然かふる縁で此叙文が一度ならるまで再度までも吾が手にかゝるも何ぞの因念ずくの思へば信田狐の皮より面の皮厚くも薄き才を以て由来なき言を漫に綴るも

維時文政七龍集甲申春王

正月ことも昔ハ岡本何がし横網連の酔翁弾初の受納場の机の下にあそぶ

驛亭駒人戯述

破落戸的
於賠見
五井正太郎

松戸軍藤次
破落戸的
附月同六

ときじらう
時次郎
うらさと
浦里
しのづかろうぢよ
篠塚老女
新古今
さゝ無母子 秋のさかり森に
かぶし嵐まれ 松子めでゝや
とこよ舎
おてる
おまつ

浦里時次郎 明烏後正夢巻之十三

江戸 南仙笑楚満人
瀧亭鯉丈 合作

廿二回

国みだれて忠臣顕れ家まづしうして孝子出づと古人の詞宜なる哉。さても上総の五井村なる彼の五郎八ハ悪丈松戸郡藤治が毒手の為に捕はれ又左衛門ともろともに。閑にまかせて代官が邸の辺りへ忍びよりしに不思義なる縁の糸も諸行無常と聞くさへ哀身につけていとゞ猶あやしく思ひながら心をしめて塀の外面よりそつとのぞいて内の様子をうかゞへば 折しもうち仲間ども五六人より集り一人のいふやう 夜ゝ酒をくらひていろ/\の中ニ一人の若き男が気を取てよつきてきて様ハ可笑て 内「コレ可笑しいハあの女に惚ているがある。のみならずにむかひとりて外の事でもないアノ先達てから下屋敷へ押しこめてあるつやゝかな女。アリヤ手前何と思ふ此事かしらねへで可哀そふなものよ其くらう事じやの 可笑「ム、こ丈夫まで武る者と思へ妾しの沢山ある事だがアノ女ハ

此邑の正兵衛といふ者の女房子もあるそふじやがアノ通り
田舎にはまれな美しい産れで有る村中での評判女なれど
お直が軍藤治さまハ顔に似合ぬ名うての女好者にて。
アノおくまが小首のまがりに惚れて人を頼んで文を送つて
いろ／＼と口説ちやれどアノ女ハかたい性で一向に寄つけず
きかぬゆゑ腹立てゐる所をねらつて悪事と思ひ
いつぞや道祖神の祭りの晩引ぱつて往つて泊まりかくした。
それから小屋敷へ入れおいて攻さいなんで紀の字ハ

そふといふ事じやがおそらくアノ女ハ貞女じやでお直が坊の云
事を聞かぬによつて今にあゝして攻られるよ 八内八テ
扨それハきついむごい事じやとおまへの軍藤治の顔みてもアノ
女が兼知甘ぬも知らぬ人面といふ人ぢや顔中が髭だらけで
髭の中から陰ゝとおかしく見えていきなりしかまつら之
ハ髭面でハあるくて顔が髭といふものぢや そしてまだ聞き
たいハ此屋敷の小使へらまして居るアノ爺さまハ何といふやの
可 嗚呼それハアノ源ちやハ今は軍藤治が此の座敷へ

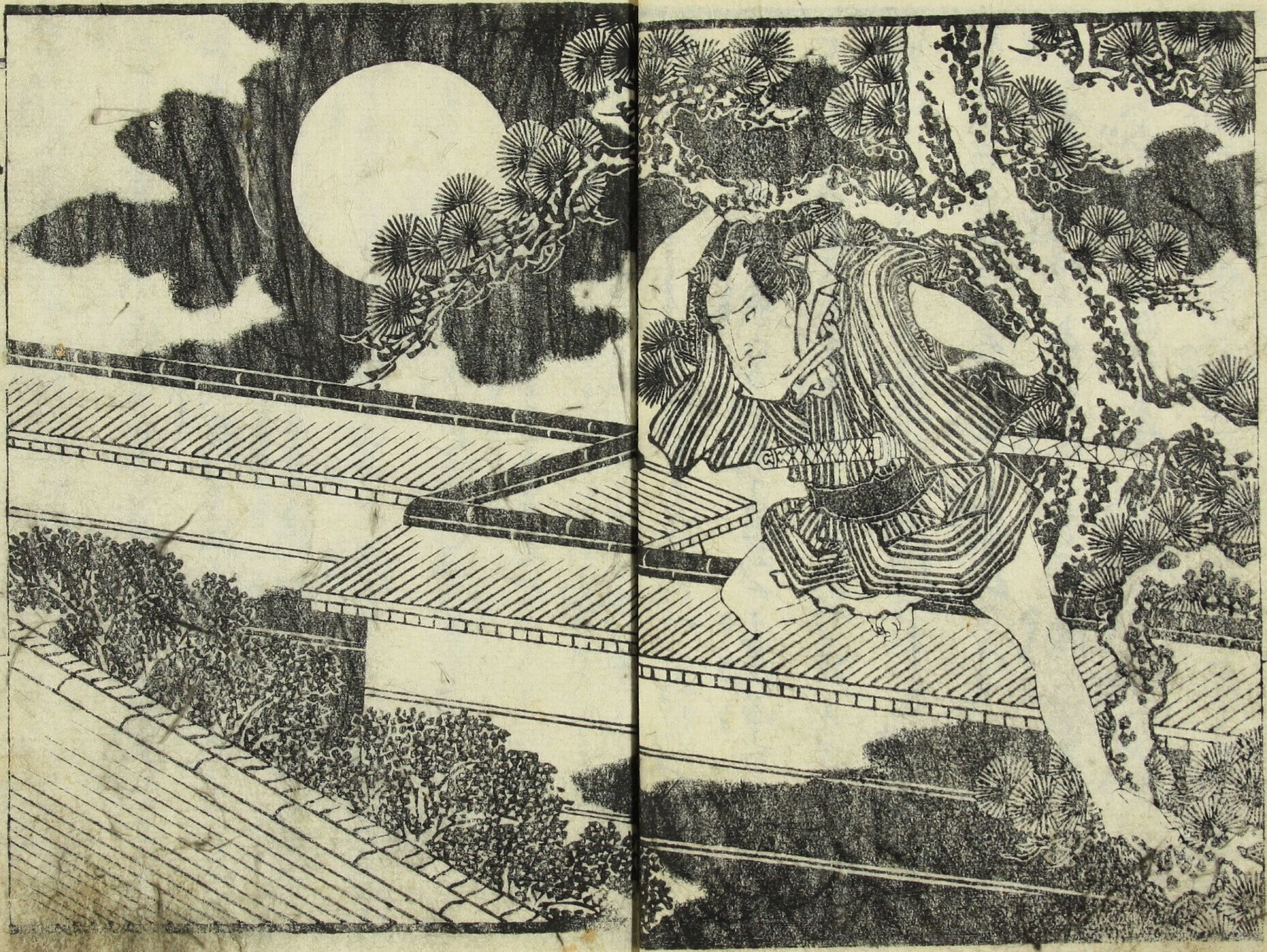
いふものでおくさまが為には舅さんやかまつてアノ親仁でうせ
にしておかんると口説おくそふとふ旦那のユアよナントおくらが
旦那六どうらいふ人でかゐるかなら　八「いゝさゐるナアお旦那などへ千
葉家の御威勢で金銀ハ沢山ありどのよふな女でも自
由自在になるにいとしがるげな差手まで帯や布子で
ハあるめへ　傾子とるなどハやきや丈の事を悪人
でハあるぞ夫でも人の事をバ何のかのとめくぢら立く
何ごともちらし人づうへのさるハ世によくひ物べうぞでハすへ。

とんごもくを分にうきこそご早くいゝとみつけて家の
屋しきとバおきてへがにせぎ六なるまいよ　可「そをまだよく
おもくそんなあなよのよめのあなどんなめにあふまいも
まぬおぢすかや今年ぎりで来年ハとんぞのくるへ嫁入
あやかト　嫁さまや姑まで角内といふ浄瑠璃のごとくびくくて　角「コレく八内そまハいくが
ささぎハどふまちのごわうかまが瀬そふぶちつとまつところ
ろ　八「ヨイくそふぶらけ。おんなり性に実がいつてささぎど
まみきとろときろぞう忘まてまみの母かきごそまいしんぞ

角「ヨツトーおそろしく此のおばさんの煮付ハべらぼうに旨く
煮たそつちの行の店ハなんざ　可「これハ大鼓判よ　角「そ
れハ気がきいてゐるもちつとくどいし。イヤこれでも旨い
うまいトよろしく酒のまはりくる程ずつとしたところにてずひぶんてうしをすゑ上戸ハ泣上戸の彼のおばさんの八百がつまらなくこぼす
八「可愛どのアノまアうそざいの御下屋敷へおしこめら
れて毎日毎晩せめさいなまるゝ女中の心の中ハどうで
あろ。おらが旦那も旦那女房でハきかねへしのハとよ
に子までなした女房中と引きさいて何不自由なきやう
てすどふしてまアおきまるものか。かれに思ひ出せバ
三年以前。嗅アのおかゝめに死なれた時やアともに冥途
と共へ行かうと思つたが近所隣の人達に異見
いはれて漸々とおもひとゞまつてそれからといふものハ。
かふして世の中も何もかもいやになつて世の中があぢき
なく酒ばかりのんで居てあげくのはてハやア女郎買
と出かけてとふく身上をまつてそれから中間奉公に
出てこのよふにおまへが女房と覚るのおやア旅人が。アノ

よふな面容のよくて気立の女とおもつたのが又とあろうかあろ。
死別れでさへかなしかろうに。そのやうすハ毎日く泣て
ばかりゐるのを見て人に連て行れて見世どんなにか
かなしかろうと思へバ気の毒につまされて その時三郎
どのとおもうがいとしがくて涙がこぼれてならぬ杢イく
ト云ふ中にも泣顔と笑上戸の
可衣ハうちすゞめて成るのでし
可「イヤこりや大笑でハく何の
人のおどよかもかとうのの笑がみろのの。コレ名ぞ千住ふ
涙こぼして泣てもたもらで何とかあふのの ウアく

ろくハくイヤきてあらい泣らとあそびうかて。ハく
てく涙と鼻とがいといよわふて座敷の中へくへくハく
そまとまるときらぶよ角内がのとおつて云イヤこりや大
笑ぞつてハくト笑へバ角内もつとして 角「何ぞそぜ
お主小さいろをきているい面を寄せおつくとコレ八内おがし
何の意味意恨があつて水のたるを涙とつとにしとて酒
の中へ入れて おまへのまぜると可衣も又可笑くて云つて
見て面てあるせんと春ご泣でいるのであるとハ此のげの



たゞの男ごコリや此ぶんでハまゝならぬぞ〳〵 可「ハヽヽヽや此男ハ
大そうな事をいふて遠慮なといふてどふする事式のことを
目を大きくしてハヽヽ何役とろうがハヽヽあるものか。
こりや大笑ごハヽヽ 八「手前達ハ何とエえんなに笑ふ
役をとりまする此ろの中に何とすると云ふがある
あのアノ女中のうちの心を思ひやりてホウイ〳〵 角「ヤイ
まごかくろ不当な男ごきまらぬぞ〳〵ト 役立ぬにも
ありや分かるまいぞ

対面よりイ〳〵の正直なる寂寞く入まるとて〳〵ぞひて明るハよりと縁とのゝ人
盗賊の家根よりぐん〳〵と行のかうろゝてころとゝまりまふ上がもぐり行まうくを
結わるゝことを云まして中やあけてやつてぞあの主六夫のあとへつ〳〵とよろこびて代り
窓の縄をとろうとせしとおりしと云ふうしふめゝぞいかけんつるきまでて下におちし井の
中へざんぶりと落たまの品物あるたに
入内へ目をさましてあわてあがり 八内「やア〳〵可笑何ぐらう大ぞうなる
音がしたぞ〳〵しつら井戸の辺へ何う落ちておちて 可「それ六
大変ごく あかりと付て中をよくろ盗人ぞろう引ずり
出して打殺せ〳〵 角「ヤア引窓が明て居るハ引窓
から井戸の辺へ人がおちたのごハテナ 宵に八早とだら
けで。人の降そうな日和でハなかつたが 可「何ぞとる無をなるぞ。

なんでも盗人にちがひない。後へ引あげてぶちころせくト
しめくゝりの奥座敷へ入るほど源へてや軍藤治おつとり刀に
手燭て 軍「ヤイ〳〵下郎どもそふぐしい何ぞや 可「ハイ〳〵
おやうでござります引まどうろう人間が井戸の中へ落ました
さ 軍「十二引まどよりあのひこんで曲ものが井戸へおちくさ
大かたそやつ盗賊であろふ。ひきずり上て吟味して「ろく
まつてと中間ども釣瓶をおろせば与三郎せんかたなくも
濡しよぼたれ上へあがれどもあがれども松戸が前へ引据れば。

軍藤治はうちながめ 軍「やア何者かと思ひの外に与三
郎そ家めぐるみ。イヤあの者はく不届な奴ぢやちや。ふ
ころまね悪源は代官の軍藤治とよく総会へいつ
たくみ出て来るそれまで今頃立戻つて身どもが座敷へ夜
夜中忍びこんだは何でも曲者寝首とらふとおもつて
但しは盗賊とおもふぐのコトそろつてとかくあべ正ちく「エヽ
口おしやあの軍藤治め女房とおひ親人まで汝が為に
とりことなし。よくも憂目にあはしくる今青妻子に

腹包とかまくらよりも立戻てよろしきと吟て捨おくまじ
翠文さへもともんと悪ひさんがる此屋敷捐練く明て
あらく是まで悪事とまたかくろうとも下りておかん
と世にも運のきるある縄目にて井戸のおちくへおちくまにも
せまくうぬらにもらうでも残念やとても已にとら
ろく命とろきさへ教せまうの死らなり恨とうきのでおく
べきろト歯がみをなしてのくしきへ軍蔵次八せんらひ
軍「さりにもの小須とゆう生てもぞさへけさぬ察れ何で

死でもたびくうものぞやでこそでさうらめが命笑泉の
きまりにまかよせおまずみの手くとりてやうきそ
ようく傍けの又も我が内通のうぬが女房のアノおくを。
美よの由良次軍蔵次八五郎と共あて首てけ人と頼で
内縁でも守の五のぬらしてめんどう由良の次郎やつのとき
くきまだれ引とって身が別荘へおいてしまへ内流落て
お妻さめちんく鴨の膝の上と草葉の蔭から見やがるまと
トあくまで悪慮さまざく思ひへかねりの主がをかくる別荘より
おへだしくておひおくあがる肯のうち迎へ年しとありきをしも数事にくるて

音の人べくあるるがあるぬと見付けし丈夫遊びし人あり
せしかりごとと咎より軍法の内にあるいかの赦免して
軍「さて女が逃
出世しもせんぞりこそやうがあるまいざるらん。汝とこころしさ
主君でアノおくさめと引きし人有無とり存せぬまじく手きち
まづそれよと六ヶあれども。そやつと親父と入金もきし一本絵
やなへつるひそでにぐさぬよみ心と身ともに捨ててこそ入るる

廿三回

不便ながら罪ある身罪よ西左衛門見る自分の密通たびしたり縄ぐ。
仕置の場所へ引き来る半の歩まへもるぞども教も余所よ

後見物「コレ是非事よ咲きやま了アノ西左郎八西左衛門殿を
生まれとやらおくさまといふ美しい女房をよアノよかる
無実の罪よおかて成仕置よるるぞやおかしいもうちの
山の神の事とやさしぶつぶつのお麦の独ぶつのと不足とふ
が恋しての向後アノよくよいもぬがよいおかずやあまるが
よふな三年二万の女房をとめて命まで息も延命うつ
くしい女房とかうあるを持ちと思ひながらよのぞや　左「ヲ、
それつくおつしましたアノ代なざどのがアノ顔で表組どのと

さながら野良猫が廿日鼠を狙ふよふなりのふぜい
と臆の気そふでへゐるまゐかとどよめく数多の役人ら
其の道しくと退きしむろくぞうと深手ある兵八
辺の人よろぎりゐるかゝる群集の其中をおしわきてる
女房お夏太郎が手を引きずりまして見るより気付
付て「あゝ浅ましやこちの人」とよろんときれと役人に
べざらまして詮方なく「其眼やりなんと冊さな
小夫兄さまおきくれてまへの若者を誰と力に

其首手をかふろでうろ夏とかぶるべきことを殺してもち
の人をどうぞ助けて下さりませコレのふしそこにゐる御代
官の御役人さまあるそのことまでおかみてこうと涙
いまゝ甘れば私とてもぞ強面ともにくしとも思しめさず
どうぞお慈悲よこちの人の命を助けて下さりませや
コレ手を合せて拝みまする其こちの人さまおまへの
夫のあるまいるの盗人じやの何のかのと悪名流けられ
殺されて死んだ跡まで私の恥身に覚えある事かは

言訳なさまと手柄せぬ。コレ太郎吉よそなるもともにおそ
ろしいやらしい意地の悪いお役人さまにおよびを
うけて爺さまの縄目を赦してもらはいのと欲に金の
じやうんぜうる稚ごゝろも父親の此ありさまを見るにつけても
太郎吉「コレ申し殿さま。どふぞ爺さまを遠慮して下さんせ。手柄
しやらいでならぬ事なら此がんもとしばらるゝとぶつなり
と勝手にさしやまして爺さまとゞばどうぞ赦して下さんせ
手柄爺さまが手柄なさると浮さまが泣しやるから

がんもかなしうてならぬ。手柄せぬ祖母さまへ仏さまと子ゝに
なりしやらし爺さまが内にのねばこそやうなしうてならぬ
手柄ぬ身まゝばあのやう小さい方の手とさぞからまにても
しやるがあまでは飯と喰ふ事もなるまいのとさぞいつぞの
かなしいの。コレ婆さまこやどふぞしやよふばいらのト子
供におろ/\と母にとりつき泣くありさま、地獄の
責と此世から見る不楽な見物も道理せめて一同に涙
に袖をしぼりける。かゝるあはれも軍治は空吹くかぜと

流し目にお縄が額をうちわるが　軍「人家にへつらん夫べ。
我まゝ人にへつらひと云ふ昔の人の篭への本とりやイ女郎め
どうじや今こそ思ひ知つたか現在夫がアノざまぢやかなし
いか口おしいかそれでこそよく。何じややるその口やかましいと
喰ふんでそれや何とぬかしやア。喰くて家へ夫が此きるな
にあふてぞ気よとりの引せて気が違ふてと見くるしく
コレよふ喰ゞよ身どもへ天千葉殿の御目通りとめて
此村々と見ろ代官ぞそよふぬかし出土わせりの女
房に何といふぞ今遇が始てござんなれの可愛のと
何私の意趣意恨で成敗とはやうら罪あろ汝が夫
正直なやと云ふハナアタア。中べん渋丈におよんで手が屋敷の引
窓から忍びこんでござさ宮めし水呑百姓の喰ふまくら
あらぬ内証の盗の出来心でしのびこんであるを
が悪い事六左まいめの天道さまが見通し。忽ち代が當
つたと見て引まどの綱が切れて下にあつた井戸の中へ
まつさかさまにぬすと鼠のやうな形で上つた所ハ何が悔てゐる

汝でさへ見とらへば直に夫婦と泣まで親子と思ひ儲る
ふぎなる形見て汝等親子の者ら怪しい奴とさへさ
事おもしろなれば出逢て召捕あめて吟味さへ中そこへ
うらくら世るるぬ飛で火に入る夏の虫不便なる事ながら
あゝこが孫へ自業自得とあきらめて念仏唱へて地獄
へでも勝手にうせろヤイそこなる女丈が成敗にあって
死でもぬふしといへ必ず悪き事とおとして所に死ふ
ならぬ不孝者と起きる女房に死ぬが嘆と世話を

ともかくものは其の方が心次第で幾人もあるぞナ。合点か ト傍
若無人の振舞に聞毎事に正三郎は奴等かふるなれど
詮もなく　正「コレ女房必ずともかくも泣き寄るな此正三郎
初より邪非道の事とては夢さら甘ねどいかなる謗るの
業因にてもあるか身を事いやしるのもして齟齬かく恥かし
めとなるとへ神仏にも見放されて身の上とても跡もなく
ても命ありなからなく今生がなく此身は情しくれど
浮世にて村人等が嘲やと手を拍ちて捨てるにぞて

侍であろう。それなれどもどうぞ生ていらるゝ人鎌倉へ行此姑様と
五郎どのへ侍つて居ましたに。残しておいては妻も有ましたが人目の繁き
武蔵の嶋に遣へやく〳〵と甘んじて居りますれば、いかほど生侍多く
「いかに気づよい女でも。目前夫の成敗にあふを見捨て
帰られませうものかいな命あらう。氏吉郎様と手にかけて。
私もともに自害して三途の川や剣の山。奈落の底の底
までも親子三人手に手をとり行が私が本望ぢやと泣
以変に及ぶ物ぞなし。コリヤ女房何と云。雨露であろうぞと
又もや覚えつゝいりみだれ。松戸へ近よると耳にもうけぬぞ
軍「ヤア〳〵未練な後悔顔時刻がうつるぞ〳〵とせつき
立られて役人は後へまはりぬく刀の白刃の光は稲妻
石久頭の上に見へぬうちから危き其所へ遠ある其の
方よりも家へ来るよと覚しき同勢。遠目にそれと見る
よりも早く止よと悪士名乗は近従の侍。
主君を聞つて松戸に向ひ鎌倉の内意によつて鎌倉の
地頭代官が邪正とまへせるに殺父の重悪もなかり

その罪人の刑伐へさつそく御侍あつかりおけよといはれて
捕られ軍蔵二瀬のつれしの主殿はさつそく忽ち縄をかけて
軍「コハ思ひもよらざる重太夫の此入國早くより存じ知る
ものハ御遠慮をもいはず侍へ申し知らせたとて不礼の段
真平御免くださるべしと追従たらたら おのれ重忠意
に馬より下りて礼を述へ 重「何ハ兎も角早速引けのちん
是より引き入られて 罪人ハ何所より来る者かてふかうて
科とおいせしとて かくハ罪ありのよふかへん其様由もと申すり

かしこまりましたと軍蔵二「イヤ此者ハ当村の百姓正
右衛門が悴丹三郎と申者のよしに存しまするが最
先達て親子右衛門の儀ハ拙者方へ召捕まして吟味最
中の所。まつさきほど丹三郎服夜深更に忍び拙者が
邸へしのび入まして金子を盗み盗賊とぞんじ早速
かしめとつて拙者の刑罪に行はんとぞんずるところで
ござるト絹に重忠とくとむけ 重「スリヤ此者がアノ百姓
でござるナ。シテ此者に八此者中 昨夜の邸へ盗賊に入

とある 軍「いかにも 重「ハテナアシテ又聞でんにハ此着に給く
お取らセるまいてチ。軍「イヤ先妻びんぜう斗の恋ととく
たまへハ去何にもとらセハいたしませぬ。重「ムヽそんならこ
ろハ。イヤ何軍蔵どのゝ燈臺元闇と申す是中増くる
大蔵がツイ目の前に主人ござるがナトこまるとハ成敗ハ
なさるまいか 軍「ムヽ大蔵がござるとハそりや何ニ 重「ヤア
たまりますハ松戸どの。その大蔵とハ悪党のなる 軍「何某
が盗人と 重「ヤア人の妻をうばひとり無実の罪に夫を殺し

もはや悪路ハかくされまいと様しぬ非道の軍蔵二そこ一寸も動
きやぞ小子きみの此国へ入るより早く家の子郎等四方へ
手くばりして國中の見変とうろひ時ふきる所あるべくとこゝろ
村々の田家の辺あたり徘徊させおやしき曲者引とらへ
吟味させしに此辺のあぶな者と聞くろ隣目の国六いろ
きぬの佐伊八とろ呼ぶ博徒と申ス夕べよりいそく拷問せ
しに其身ハ勿論汝が悪事つゝ白状いたせしぞと聞きて
織ハ軍蔵二両とものごとく不変じもまくふるへて居ける

とて重忠座を立て五郎が縛めを解きとて
重「あつぱれ汝は王法あり仏法あり神明あり当時右幕下頼朝公仁政四海にあふるゝといへども猶つくさゞる隈もあるべしと密に我に命じ諸國を巡見させらるゝこと全く其の國司代官非義の行ひあるべきことを正せと密々の御諚を受け所々を巡り越しつゝ此宿へ来りしとあげて曲者なりと言をも改めず其役目先へまゐりし其者ともに松戸が非分の所行へ出し其中に五郎といへる者汝に似たりて

来りし往来の路次に待うけ訴へしそのおもむきを述べく理不当にて打擲し土民の難儀に遠く及ぶまでまかりこしたる某が心をくだき悪漢が向ひたる白状にて其方親子が罪なきことを重忠とくより承知せり汝は勿論親諸ともに命を助けてつかはすぞ間もなく案ずることなかれ汝へいふまでもなく若年の頃より村人どもが此年頃志をあげられしうつふんをはらさん物と妻子を捨て命を惜まず鎌倉へ訴へ出しは身の程を知らぬ一向まつて取立てくれん由ふかく

およんで父が身の捕はるゝことを歎きかなしみ。もとの御ざんにと
代官が屋しきへ獨りきたりのびいる。雄々しき大和魂は武士も
およばぬ勢ひ猛烈感ずるにあまりあることなり。又菅原の
お組とやらん松戸が悲歎の様を見て苦節をまもりて
操を母がらね孝といひ貞といひ此夫に此妻あり宜
なく竹帛にとゞめおきて其勲を賞せんかゝることに付ても
不便なるは其実弟が母と妹の憂に得さへで自殺して。
黄泉の人となりけるよし重忠寔へ其る夫の全首ごと

果なるべしと自殺はさせずさすがに千金にかへがたき
人の命をとりかへせし家累なかるまじ。まして松戸は
此年須村氏ども志へにげし。その上にも飽でゐる他の
妻を奪ひ其夫をも殺さんとまでたくみし姦悪なれど
にくむに絶たる悲歎のごとく貪慾に引かるゝ人亦き罪科よ
行へしと殘るくなりし仁恵に悦びあへざるべし。
○かくて西志の親子は重忠が仁心みてあやうき
命をとりまかり村長と命ぜられ此度の恩賞として

苦力と申すさへしらざれば寺方なく。それに
付ても母の櫻子とうるはし多くの僧に供養し。西
仏るくと弘んごろにとむらひ西吉ハ剃髪なし
念と改め過ぎ行光に菴をむすび行ひすまして
八十余歳の上寿を保ちめでたく往生をとげ
たりとなり又松戸軍蔵二悪漢同六佑保八ハ鎌倉
由井が濱にて重き刑におこなはれ西吉郎に代りて
重者ハ祈出し五百余にも数のかうびとの入り国中
夜戸ざまで村民ハ西吉郎が善行をとなへ且ひ信
とめて吏を立ハ一邑大いにおきまりて目出度
祥のをきつぎしも西吉郎お細ち吉郎ま春ならんこの
末よ於しるしとすべし。

浦里時次郎明烏後正夢巻之十三了